



旧昭和村の首都として
旧十和村東部の拠点として

四万十町
町内
ぶら～り
散策

昭和⑤ ～昭和・中心部～



四手村～西上山村～昭和村～十和村～四万十町

前回「旧昭和村は、元は四手村といった」と書いた。歴史を辿ればこうだ。まず、戦国期の記録に「四手村は大井川村を構成する一村」とある。江戸期を経て、明治22年、四手村を含む12村が統合して西上山村となる。昭和3年、昭和村に改称。同32年、十川村と合併して十和村に。この時に、集落名として残っていた「四手」も昭和に改称された。長きにわたり首都であった昭和は、十和村になってからも、村東部の核、あるいは拠点としてその機能を果たしてきた。四万十町になってから、いくつかの施設などが十川へと統合されたが、国保診療所や福祉施設などはそのまま昭和に置かれた。郵便局や小学校は、今も旧昭和村の顔だ。昔は映画館もあったという昭和の街。街中をはさんだ東の郊外が四手崎とすれば、西の郊外が、昭和大橋～十和トンネル間の北側斜面の集落「大保木」である。

街化してゆく昭和

「首都」「核」「拠点」と書いてきたが、前述のように、明治以前は、対岸にある大井川村（現大井川地区）がその役割を担っていた。大井川村の方が農地の規模が大きかったからであろう。しかし、街化する要素が「農地本位」から「交通（人・物の流通）本位」へと転換し、その関係性が逆転していったと考えられる。例えば、江戸期に主要産業化が加速した林業に着目してみると、地区全体がその出荷ルートである四万十川に面していたことが挙げられる。また、近代化に伴って国道が整備され、さらに鉄道も走るようになり、昭和は着実に街化していったのである。

ただ、もともと「拠点」となる基盤はあった。それが街の背後の山麓にあった山城「四手城」であり、産土神の炎神社である。とりわけ明治期に遷宮された三島神社の存在は大きい。

「昭和」の名の由来

さて、昭和という名称について。昭和3年7月に西上山村役場が出した村名改称についての答申を抜粋する。「古来、…上山郷と称したに起因し…今日に至るも、その後、東上山村は大正村と改称した。よって本村も西上山村と称する理由之なく、今日の御大典を記念として、村名を昭和村と改称し…」とある。これを基にした申請が、同年10月に許可されたのである。今では地元でも知る人が少なくなった昭和の街の名の由来である。



昭和村役場があったところ。右の鳥居が三島神社への入り口。左には昭和保育所があったが、現在は住宅となっている。

町のうごき

(8月31日)	人	口	前月比		出生	死亡	転入	転出
男	7,453	-9		男	3	19	22	15
女	8,063	-13		女	3	16	12	12
計	15,516	-22		計	6	35	34	27
世帯数	8,112	-10		(8月中の届出)				
窪川地域 11,038人 大正地域 2,135人 十和地域 2,343人								